

# ポラス阿波踊り慰問団が被災地、閑上を訪問 震災から6年 求められる被災者に寄り添う復興支援

2017年4月22、23日、ポラスを中心とする南越谷阿波踊り振興会の一行が、東日本大震災の被災地の一つである宮城県名取市の美田園第一応急仮設住宅を慰問した。ポラスが同仮設住宅を建設した縁をきっかけに実施しているもので、今回で6回目となる。阿波踊り振興会一行に同行し、復興を目指す被災地の今を取材した。

例年8月に埼玉県の南越谷で開催される阿波踊り。地元企業であるポラスグループが阿波踊りの文化が根付くまでに先導的な役割を果たしてきた。今も多くは社員が、通常業務の傍ら熱心に阿波踊りに打ち込み、踊りの腕を磨いている。住宅資材センター事業部の施工部の土屋誠部長もその一人だ。

東日本大震災が発生した直後、(一社)日本木造住宅産業協会からポラスグループは応急仮設住宅建設の要請を受けた。土屋部長は、宮城県名取市に入り美田園第一応急仮設住宅建設の指揮をとった。工事は突貫で進められ、約1カ月で全128戸の応急仮設住宅が完成。その後も土屋部長は、メンテナンス工事などを行うために頻繁に現地を訪れ、応急仮設住宅の住人との交流も生まれてきたという。そうした中

## 閑上地区に限れば人災 700人以上が津波の犠牲に

一行がまず向かったのは、震災で甚大な被害を受けた名取市・閑上地区の海岸沿いに新たに整備された物産観光施設「閑上メイプル館」だ。閑上メイプル館がある一画は、閑上港にも近く週末には、新鮮な魚介類が並ぶ「ゆりあげ朝市」が開催されている。炉端焼きのスペースなども設置され、購入した魚介類をその場で焼いて食べられる。

## 応急仮設住宅の供与期限が間近に 災害公営住宅にも課題は山積

災害公営住宅などを視察した後、バスで10分ほど移動し、美田園第一応急仮設住宅を訪れた。迎えてくれたのは、高橋善夫自治会長だ。「阿波踊りは先祖を奉る踊りでもあると聞いている。住民も毎年、楽しみにして待っている」と阿波踊り慰問団を心待ちにしていたようだ。

高橋自治会長は応急仮設住宅の現状を語ってくれた。美田園第一応急仮設住宅の供与期間の期限である2018年5月が迫っているが、全128戸のうち未だ70戸以上の住戸で多くの住人が暮らしている。

高橋自治会長は「公営災害住宅の整備は進んでいるが、お金があり、抽選に当たった幸運な人達しか入れない」「公営災害住宅の家賃設定は家族全員分の収入を合算して算出するため、世帯数が多くなるほど家賃が高くなる。高齢者世帯は、子世帯と別々にならざ

多くの地元住民や観光客が訪れ、復興のひとつのシンボルとなっている。

閑上メイプル館では、ゆりあげ港朝一協同組合の櫻井広行代表理事が、語り部となり、津波体験を聞かせてくれた。言うまでもなく、この閑上地区は、東日本大震災で甚大な津波被害を受けたエリアの一つだ。度々津波に襲われる三陸のようなリアス式の地域とは違い、過去に襲われたことがなかっただけに、「閑上には津波は来ない」と地



ゆりあげ港朝一協同組合の櫻井広行代表理事が、語り部となり、津波体験を聞かせてくれた

るを得ない」「この美田園第一応急仮設住宅には、閑上のはほぼ同じエリアに住む人たちが集団で移り住んできた。災害復興住宅にも、集団で移り住める仕組みがあればいい。この応急仮設住宅で築いた住人同士の友情や信頼関係がバラバラになってしまうことを心配している人も多い」といった様々な課題を上げ、「行政は被災者が何を心配しているのかを分かっている。被災者を突き放すような形で復興が進んでいることは寂しい」と述べた。

かさ上げされた土地に災害公営住宅が整備されている風景からは、復興は着実に進んでいるようにも見えるが、今も応急仮設住宅で将来の不安を抱えながら生活している人たちの声には、必ずしも添う形にはなっていないようだ。応急仮設住宅の供与期限が近づくと、本当の意味で被災者の救済につながる取り組みが求められている。

## 応急仮設住宅で阿波踊りを披露 慰問団と住人の笑顔の輪が広がる

一行は名取市内で一泊し、慰問2日目の早朝に、多くの人で賑わうゆりあげ朝市会場で踊りを披露した。阿波踊りの事前告知があったため、いつも以上に朝市への来場者は多かったようだ。その後、バスで美田園第一応急仮設住宅に向かった。すでに、阿波踊り振興会の到着を待ちわびた多くの住人た



慰問団一行は応急仮設住宅で阿波踊りを披露。住民も踊りの輪に加わった



かさ上げされた土地では、災害公営住宅の整備が進んでいる

元の人の間で言い伝えられていた。こうした間違った認識が、被害者の増大を招いた。地震発生から約1時間後に高さ約8.5mの津波が同地区を襲い、700人以上の尊い命を奪ったのだ。なかには、学校などの避難所に一旦は避難しながらも安心だと考え、自宅に生活用品などを取り戻した人、車で避難したものの渋滞に巻き込まれ立ち往生していた人なども多くいたという。櫻井理事長は「閑上地区に限って言えば人災であった」と言い切る。「もつと事前に対応できることはなかったのか」という問いが、語りの口調に凄みを与える。過去に東北で津波被害があった地域の住民の間では、「地震が来たらなりふり構わず高台に逃げる」を意味する「津波でんでんこ」という言葉が膾炙している。櫻井理事長の語りを通じて、その言葉の意味がより深く分かった気がした。



美田園第一応急仮設住宅の高橋善夫自治会長は「被災者を突き放すような形で復興が進んでいることは寂しい」と述べた